中学校で軟式野球に取り組める環境を

～野球部が地域を元気にする～

富山県小矢部市　中川　利昭

はじめに

近年、子どもたちにおける野球人口が減少していると言われている。特に、中学校軟式野球部の部員数は 10 年で半数近くに減ってしまっている。少子化が原因だと思われがちだが、実際には少子化の影響だけではない。

図 1 が示すように、公益財団法人日本中学校体育連盟（以下、「日本中体連」という。）の軟式野球の部員数（男子）は、2009 年には 307,053 人だったが 2018 年には 166,800 人と、10 年で 140,253 人（45.68%）減少している。それに対して、サッカーは、同じ 10 年で 27,608 人（12.33%）減少、バスケットボールは、9,242 人（5.36%）減少で、軟式野球の減少率が他の部活動に比べて特に高いことがわかる。

加えて、サッカーやバスケットボールは多少の増減があっても部員数を維持しているが、軟式野球は、大幅に減少している。10 年前には軟式野球部員が圧倒的に多かったが、現在ではサッカーに抜かれバスケットボールと同じぐらいになっている。

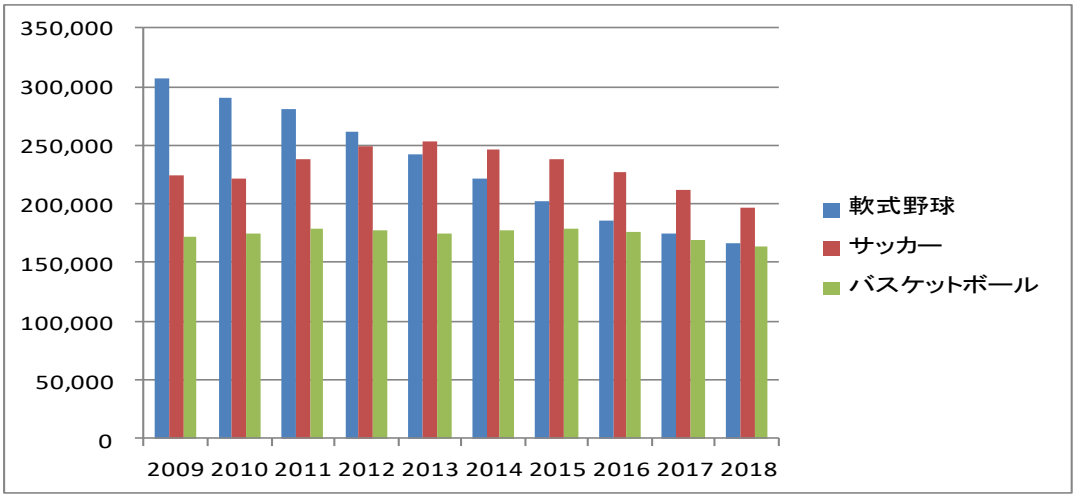
同じ時期の男子中学生の減少人数が、176,671 人（9.61%）であることから、生徒数の減少率以上に軟式野球部員数の減少率が高いことがわかる。このことからも、野球人口の減少は、少子化の影響だけではなく、子どもたちの野球離れが進んでいることが影響していると分かる。こうして、中学校軟式野球部の存続が難しくなってきているのだ。

高校の場合は、野球部のある高校を選択して進学すれば、野球ができる。しかし、中学校は基本的に通学区域によって進学先が決まる。それゆえに、中学校の野球部員数が確保できなければ、試合に出場できないこともある。実際に筆者の長男が中学 2 年生の時には、人数が足りないために新人戦に出場できず、悔しい思いをしていたのを見ている。現在、中学 1 年生の次男も同じように新人戦に出場できないかもしれない。

中学校の軟式野球部以外に、ボーイズリーグ等の硬式野球のクラブチーム（以下、「硬式野球クラブ」という。）でも野球はできるが、小矢部市内には硬式野球クラブがないので、市外の硬式野球クラブに入らなければいけない。

全国地域リーダー養成塾で主任講師である法政大学の図司教授から「自分ごとから、地域を感じる。」という言葉もあり、自分たちが直面している問題でもある中学校の軟式野球部の存続問題をレポートのテーマとして考えていきたい。

図１　中学校部活動部員数（男子）の推移　　（単位：人）



（日本中体連「加盟校調査集計表」より作成）

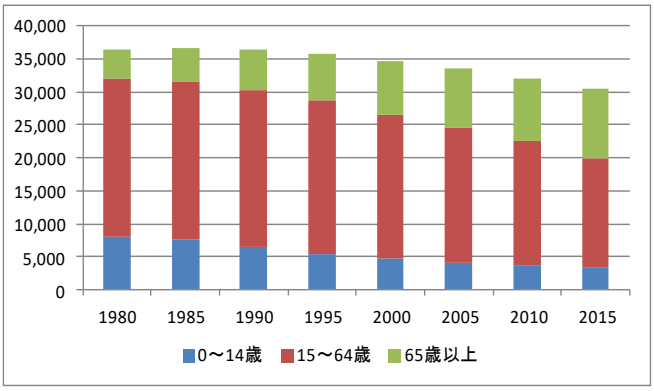
１　小矢部市の概要

小矢部市は、富山県の西の玄関口、石川県境に位置する人口 29,816 人（令和元年 11 月末現在）、面積 134.07 平方キロメートルの市である。北・西・南の三方が山や丘陵で囲まれ、平地の東側が散居村で有名な砺波平野の一部を成しており、市域の約 3 割を占める田畑は豊かな水稲単作の穀倉地帯となっている。

総人口の推移をみると、1986 年の 37,055 人をピークに年々減少し、2015 年には 30,399 人となっている。年少人口（15 歳未満）は、1980 年に 7,927 人だったが、2015 年には 3,319 人になり 4,608 人減少している。

市内には、石動小学校、東部小学校、大谷小学校、津沢小学校、蟹谷小学校の 5 校の小学校がある。中学校については、石動小学校と東部小学校の児童が進学する石動中学校、大谷小学校の児童が進学する大谷中学校、津沢小学校の児童が進学する津沢中学校、蟹谷小学校の児童が進学する蟹谷中学校の 4 校があり、図 3 のとおり位置している。

図２　小矢部市人口推移



出典：総務省「国勢調査」

図３　中学校位置図

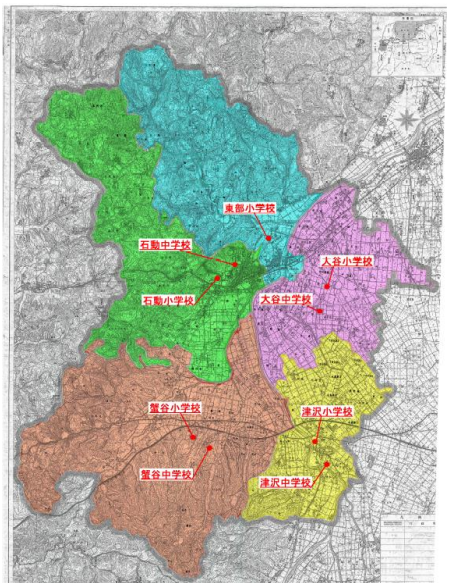
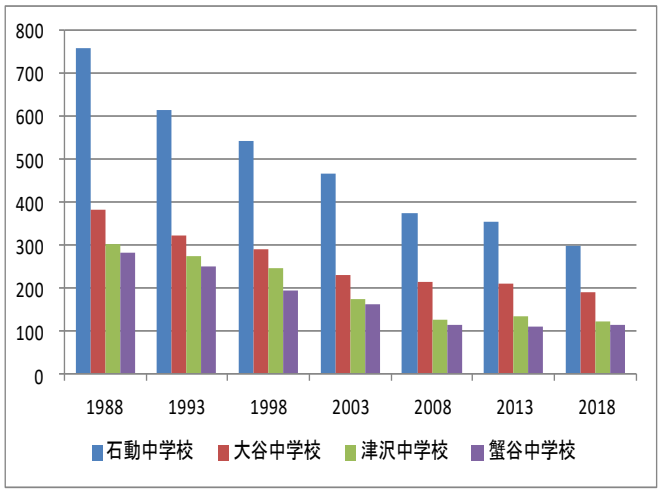


図４　中学校生徒数の推移　（単位：人）



（小矢部市教育委員会教育総務課提供データ）

中学校生徒数の推移は、図 4 のとおり、どの中学校も 2018 年の生徒数は、1988 年時点から半分以下となっている。石動中学校は、男子 142 人、女子 155 人の計 297 人で一番多く、次いで大谷中学校は、男子 95 人、女子 95 人の計 190 人、津沢中学校は、男子 72 人、女子 52 人の計 124 人、蟹谷中学校は、男子 67 人、女子 47 人の計 114 人で一番少ない。全体として少子化の影響により、生徒数が減少してきている。

２　当市の中学校軟式野球部の現状と課題

当市の 4 つの中学校において、軟式野球、サッカー、バスケットボールの 3 種目の部活動を見ると、表 1 のように、どの学校にも軟式野球部はあるが、蟹谷中学校にはもともとバスケットボール部はなく、津沢中学校は、サッカー部とバスケットボール部がない。

野球は 9 人、サッカーは 11 人、バスケットボールは 5 人の選手が最低必要となる中で、2019 年度の 1～3 学年の合計部員数は、表 1 からどの競技でも最低限の人数は確保できている。しかし、3 年生が抜けた後の新人戦では、1～2 年生でチーム編成しなければならない。その場合、サッカー、バスケットボールは、どの学校も確保できるが、野球は、蟹谷中学校、津沢中学校では活動が難しい状況になってしまう。

また表 2 から、過去 3 年間の部員数の推移をみると、サッカーは 30 人以上の部員数を確保できているが、軟式野球は 10 人あまりしか確保できていない中学校もあり、当市でも野球離れが進んでいることがわかる。

表 1　2019 年度 市内中学校部活動部員数（男子）　（単位：人）

	石動中学校				大谷中学校				津沢中学校				蟹谷中学校			
	1年	2年	3年	合計	1年	2年	3年	合計	1年	2年	3年	合計	1年	2年	3年	合計
軟式野球	5	10	6	21	3	9	2	14	2	1	8	11	3	4	7	14
サッカー	9	14	8	31	15	12	10	37	－	－	－	－	10	20	13	43
バスケットボール	12	2	4	18	6	5	4	15	－	－	－	－	－	－	－	－

（小矢部市教育委員会教育総務課提供データ）

表 2　市内中学校部活動部員数（男子）の推移　（単位：人）

	石動中学校			大谷中学校			津沢中学校			蟹谷中学校		
	2016	2017	2018	2016	2017	2018	2016	2017	2018	2016	2017	2018
軟式野球	16	16	23	16	10	14	10	16	12	22	23	21
サッカー	39	35	36	38	33	33	－	－	－	32	37	46
バスケットボール	19	15	11	30	32	21	－	－	－	－	－	－

（小矢部市教育委員会教育総務課提供データ）

3 年生が抜けた後の新人戦で選手の人数が揃わない場合、同一市内（無理な場合は、同一地区内の隣接する市）で、単独でのチーム編成が困難な 2 校が 1 つのチームを編成するか、人数が満たない学校が、人数に余裕がある学校から部員を借り編成するチームのいずれかで出場できる。実際に、2019 年の地区新人戦には、津沢中学校と蟹谷中学校は合同チームで出場していた。しかし、2017 年の地区新人戦では、大谷中学校は選手が揃わず、市内に選手が不足する他の学校も、部員を貸してくれる学校もなかったため、出場できなかった。

中学校で部員の確保が難しくなっている背景として、中学校の野球部に入らず、学外の硬式野球クラブに入る生徒の存在もある。硬式野球クラブに入った生徒の保護者に、その理由をヒアリングしたところ、次のような回答があった。

Ａさん：高校で野球部に入り甲子園に出場するためには、中学生の時から硬球に慣れておいたほうがよいから。

Ｂさん：人数が多いチームで切磋琢磨することが必要だと思ったから。

Ｃさん：本当は中学校の野球部で入りたいが、人数が足りず試合に出場できない場合もあるので、人数の心配がない硬式野球クラブに入った。

Ａさん、Ｂさんは、前向きな理由で硬式野球クラブに入っているが、Ｃさんは、本当は中学校の野球部の方がよいが、部員数の心配から硬式野球クラブに入っている。地元の中学校の野球部で活動したい子どもたちが、それがかなわず、硬式野球クラブに入っていることは問題であると考える。

小矢部市内の小学生は市内のスポーツ少年団に入団することで野球ができ、様々な大会にも出場できる。中学生でも野球をするには、市内の中学校の野球部に入部するか、市外にある硬式野球クラブに入ることになる。しかし、中学生の大会は日本中体連や県中学校体育連盟（以下、「中体連」という。）の主催で、中学校単位での出場となるため、クラブチーム所属では大会には出場できない。

したがって、大会出場の目標をもって野球をするためには、中学校の軟式野球部の存続は必須であり、そのために部員数を増やす取組が必要である。

３　中学校野球部の可能性を先進事例から探る

中学校野球部の存続に向けて、3つのタイプの先進事例を分析してみたい。

（１）新潟県村上市　NPO法人希楽々（きらら）における「新しいカタチの部活動」

新潟県村上市の総合型地域スポーツクラブNPO法人希楽々（以下、「希楽々」という。）では、複数の学校の生徒が参加する「新しいカタチの部活動」に取り組んでいる。そこで、理事長の渡邊優子氏に話を聞いた。渡邊氏は、スポーツ庁の運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン作成検討会議の委員も務めていた。

〇取組の背景・経緯

希楽々は、村上市に合併前の神林村（現在の神林地区）が文部科学省のモデル事業に手を挙げ、平成15年に設立された。その中で、中学校の部活動にはない女子バスケットボールをしたい生徒たちがいて、保護者も部活動の新設を学校に懇願したが、学校側からは新設できないという回答があった。そこで、生徒たちは、希楽々のサークル活動としてバスケットボールを始めたが、中体連の大会にはクラブチームでは出ることができないという問題に直面した。

平成24年には、希楽々はスポーツ振興くじの助成でバスを購入し、小学校のアフタースクール事業を行っていた。アフタースクール事業は、小学生を対象とし、下校時にバスで小学校から希楽々の体育館に向かい、体力づくりやものづくりなどを行う事業である。そこで、この事業をアレンジして、中学校、保護者、希楽々の3者で協議、合意し、平成25年度から学校の部活動に準ずる「新しいカタチの部活動」を始めることになった。

スタートした「新しいカタチの部活動」では、学校の部活動にない女子バスケットボールをしたい生徒が放課後にバスで移動し、クラブの体育館で練習する。

平成25年は中学校2校から12名が参加し週2回の活動で、クラブ登録指導者が指導していた。平成26～27年には、中学校3校から17名が参加し、週4回（火・水・金・土）の活動に増え、クラブ職員と外部指導者が指導するようになった。また、バスケットボール活動以外にクラブイベント等にボランティア参加し、活動は充実していった。さらに、平成28年には、サッカーも開講し、中学校3校から26名が参加し、週3回の活動で、クラブ職員と外部指導者が指導した。

しかし平成29年、女子バスケットボールは希望者1人で休部となり、サッカーも、クラブチームの指導者と指導方針が合わず1年で休部となっている。

〇取組の成果

女子バスケットボールをしたいと考えた中学生によって「新しいカタチの部活動」が実現した。そして、中学校名での中体連の大会参加を学校が認めてくれ、学校の先生が監督

となり、各中学校単位で大会に出場できた。
　地区を越えて 3 つの中学校が集まっているので、学校からの移動のバスの中など学校区の垣根を越えた交流が生まれた。また、クラブ管理下の活動のため、スポーツクラブフェスティバルやスポーツマーケットなどのスポーツクラブイベントにボランティアとして、ブースを出展したり、アトラクションでダンスをしたり、運営に参加協力することで、世代間交流ができ、中学生の社会性やマナーが向上した。

〇取組の課題
　中学校単位では中体連の大会に出場できたが、希楽々というクラブチームとしては出場が認められなかった。中体連の大会参加資格が見直されないと解決できない課題である。
　一方、学校側は、新しい種目に取り組むと既存部活動の部員数が減る可能性があり、生徒には広く周知できない。
　また、校内の部活動に準ずる活動を校外でおこなっているため、学校の部活動とは位置づけられず、学校からの協力や金銭的な援助もない。保護者も、部活動に準ずる活動のため、内申書などに活動の成果を記載されるかを気にしている。
　子どもたちとしても、本来の部活動ではないから選択しない子が次第に多くなり、女子バスケットボールの希望者がいなくなっている。村上市の女子の部活動はバレーボールか卓球しかなく、文化部に入部して運動をしていない子どもが増えてきている。

〇中学校の部活動に対する思いや期待
　中学校の部活動は、人づくりのひとつとしてあるべきものなので、なくしてはいけない。もっと野球をしたい子にはできる環境を、楽しみたい子には楽しめる環境をつくることも今後必要となってくる。
　中学校の運動部の問題を解決するためには、運動をする子どもが減ってきている問題を解決しなければいけない。そのためには、小さい時からの運動が大事で、小さい時から楽しく運動できる環境づくりを、保育所、小学校から改善していくことが重要である。

（２）石川県かほく市における学童野球チーム「宇ノ気ブルーサンダー」のチーム方針
　宇ノ気中学校野球部の保護者とこのレポートのテーマについて話をする機会があった。その時に、宇ノ気小学校の学童野球チーム「宇ノ気ブルーサンダー」（以下、「宇ノ気ブルーサンダー」という。）には、硬式野球クラブに行かずに、地元の宇ノ気中学校の野球部で一緒にプレーをする方針があると聞いた。そこで、宇ノ気ブルーサンダー代表の広瀬勝巳氏にチーム方針などについて話を聞いた。
　ちなみに、今シーズンよりプロ野球選手になる奥川恭伸投手と山瀬慎之助捕手は、2019 年夏の第 101 回全国高等学校野球選手権大会で準優勝した星稜高校の出身である。プロ野球ドラフト会議で、2 人そろってプロの世界へ進むことが決まったが、その 2 人が小学校時代にプレーしていたのが、宇ノ気ブルーサンダーであり、中学校時代にプレーしていたのが宇ノ気中学校の軟式野球部である。なお、広瀬氏は奥川選手と山瀬選手が宇ノ気ブル

ーサンダーに所属していた当時は、監督を務めていた。

○チーム方針について

高校に上がるとメンバーは別々になってしまうので、中学校までは同じメンバーで一緒にプレーしてほしいという思いがある。チームの方針として、硬式野球クラブからのオファーも断っていた。

宇ノ気野球場、金津ソフトボール場などを、かほく市から無料で使用許可を得ているので、地元の中学校野球部で活躍して、かほく市に恩返しをしたいと考えている。

○中学校の部活動に対する思いや期待

中学校の部活動は、人生の土台づくりの場であると思う。中学生が人間形成に一番大事な時期だと思うことから、小学校と同じ仲間で中学校でも野球をすることが人生にとってよい。子どもたちは中学校の部活動を通して、将来の仲間づくり、絆づくりができる。

広瀬氏には、将来は自分のバトンを渡して、宇ノ気ブルーサンダーの指導者や宇ノ気中学校のコーチになって欲しいという思いもある。

（３）高知県梼原町における梼原高校野球部と地域との関わり

第 31 期全国地域リーダー養成塾図司ゼミでは、高知県で先駆的地域づくり現地調査を行い、梼原町副町長の西村新一氏から、梼原高校の野球部が、創設 11 年目の平成 29 年に夏の第 99 回全国高等学校野球選手権大会高知大会の決勝戦に進出し、町民の多くが球場に応援に行き町全体が盛り上がった話を伺った。結果は準優勝だったが、その後、野球部に入部するために梼原高校に入学する生徒が増加している。

また野球部員たちは、冬には町内の雪かきの手伝いをし、地域住民からも愛されているという話から、後日、改めて西村氏に梼原高校野球部と地域との関わりについて話を聞いた。

○梼原高校野球部ができた背景と経緯

平成 18 年には、梼原高校にはソフトボール部しかなく部員も 3 名であったが、その部員から野球をやりたいという申し出が校長にあった。

当時、入学者数が 20 人を下回っており、2 年連続で 20 人を下回ると高校の統廃合の対象になるという規定があった。そうした中、中学校で野球をやっていた生徒が、高校でも野球をやりたいために町外の高校へ進学していたこともあり、校長がまずは野球の同好会を立ち上げることを決断した。そして、平成 19 年に野球部が発足された。

○地域が応援する理由

町外から梼原高校へ入学する生徒のほとんどが野球部関係のため、梼原高校存続には野球部が必要であると思っている。平成 29 年の夏の高知大会で準優勝したことによって、甲子園出場への期待が高まり、甲子園出場は野球部だけの夢ではなく、住民の夢となり、一

緒に夢を叶えたいとの思いがある。また、野球部員の日頃からの挨拶や、清掃作業、雪かきなどによる地域貢献によって、地域住民が野球部員を梼原の子どもたちと思い、親しみや応援したいという気持ちになっている。

高校生も勉強や部活動だけでなく、高校生活の中で地域とのつながりの重要性を学んでいて、人としてあるべき姿を身につけている。町外の生徒にとっては、梼原が「第 2 のふるさと」となり、生徒たちも町や地域に恩返しをしたいという気持ちがある。

町も、「子どもは地域の宝！」として、18 年間で「“梼原人”を育てること」を基本に、町の最高学府である梼原高校を支援しながら文武両道の人づくりを行っている。野球部に特化せず、梼原高校の存続が町づくりを進める上で重要であることから、県立高校でありながら町が高校の魅力化に向けて地域と共に支援をしている。

〇梼原高校野球部が地域に与えた影響・効果

子どもたちが梼原に残ることによって、町が活性化している。元気に挨拶してくれることで、住民も町も明るくなった。高校生が部活動やボランティアなどの活動をしていることが住民に見えるので、住民も刺激をうけて、力や励みになり、懸命に高校生を応援する。そのことにまた生徒が応える。そうした循環がよりよい町づくりにつながっている。

校長先生や高校生の意見を取り入れ、バスやシェアハウスを町から梼原高校へ無償貸与している。バスやシェアハウスの導入が、基盤づくりになり、安心安全なまちづくりにもつながっている。

（４）３つの事例分析から見えてくるもの

希楽々の事例からは、スポーツクラブでの部活動でも、中学校単位でしか中体連の大会に参加できない課題があり、やはり根本の中学校野球部の部員の確保が必要だと感じた。そのためには、競技者の裾野を広げていくことが重要であることがわかった。

次に、宇ノ気ブルーサンダーの事例からは、高校になるとメンバーは別々になってしまうため、中学校までは同じメンバーで一緒にプレーすることで、将来の仲間づくり・絆づくりができることから、中学校の野球部の必要性を感じた。こうして、小学校のスポーツ少年団と中学校の野球部の連携をうまく図っていくことが重要になりそうだ。

そして、梼原高校野球部の事例では、野球部の部員たちが元気に町中で活動することで、住民も町も野球部を応援し明るくなる循環がよりよい町づくりやチームづくりにつながっていることを学んだ。

４　当市の中学校軟式野球部員数増加のための提案

スポーツクラブでの部活動では中体連の大会に参加できないため、まずは既存の単独の中学校野球部の部員数を増やし存続させることを考えていきたい。

①市内の野球スポーツ少年団との連携を強化

宇ノ気ブルーサンダーの事例のように、市内の全チームに中学校の野球部に入部すると

いうチーム方針をつくってもらうのは難しい。しかし、スポーツ少年団でも一緒にプレーしたことがある仲間と中学校でも一緒にプレーをしたいという気持ちは小学生にもあるだろう。そこで、シーズンオフの冬場の練習時に、中学校の部員とコーチがスポーツ少年団員を教えにいく。一緒に練習等をすることによって、小学生に中学校の野球部でも一緒にやりたいと思ってもらい、中学校の野球部への入部につなぎたい。

②練習できる環境を整える

市内 4 つの学校で毎週合同練習を行い、人数が少ない学校でもいろいろな練習ができる環境を整える。

③中学校から野球を始める生徒を増やす

中学校から新たに野球を始める選手を対象にした野球教室を実施し、入部のハードルをさげる。また、親の負担を少なくし、親の理解も得ることも必要となる。

④市内で 1 チームとすることを検討

少子化により将来的には学校単独での部活動運営が困難になってくる。希楽々の事例のようにスポーツクラブで部活動を運営し、市内で 1 チームにすることを検討していかなければいけない。

スポーツ庁の運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインの「学校単位で参加する大会等の見直し」では、複数校合同チームや学校と連携した地域スポーツクラブの参加など参加資格の在り方についても見直しを行うようだ。クラブチームでは、中体連の大会に出場できないという課題は解決される可能性があるため、今後も引き続き検討していく必要がある。

5　当市の野球人口を増やすための提案

中学校の運動部の部員数問題を解決するためには、そもそも運動をしている子どもが減ってきている現状に対して、競技者の裾野を広げていく必要もある。

①小さい子ども向けの野球（ティーボール）教室の実施

小さい時から野球（ティーボール）に触れることで、野球に興味を持ってくれる子どもが増えることが期待される。そこで、中学校や高校の野球部員が、スポーツクラブやスポーツ少年団と連携して、保育所（こども園）などで小さい子ども向けの野球（ティーボール）教室を行う。小さい子どもたちにとって、中学生や高校生のお兄さんたちに教えてもらうことは、とてもよい経験になる。それを、小学校低学年の体育にもつなぎ、打つ、捕る、投げる、走るなどの基礎技術を身に付ける。

②プロ野球選手による野球教室の実施

当市出身で東京ヤクルトスワローズ所属の荒木貴裕選手に市内の子ども向けの野球教室を開催してもらう。プロ野球選手と触れ合う機会を設けることで、子どもたちに自分もプロ野球選手になりたいと思ってもらい、野球を始めるきっかけとなることが期待される。

おわりに

当市でも昭和 53 年(1978 年)、石動高校野球部が夏の第 60 回全国高等学校野球選手権記念大会富山大会に優勝し、念願の甲子園出場を決めた。甲子園初出場に、小矢部市民は盛り上がった。高校の同窓会、野球部ＯＢ、後援会が中心になって選手や応援団を派遣する準備を行い、試合の当日、約 3,000 人が 60 台という数のバスで、甲子園球場へ応援に繰り出した。

平成 30 年（2018 年）の第 100 回全国高等学校野球選手権記念大会富山大会では、石動高校はノーシードから勝ち上がり、優勝候補の富山商業高校を破った試合は特に盛り上がり、多くの人が注目し、市内のみならず富山県内を沸かせた。35 年ぶりにベスト 4 に進出し、40 年ぶりに甲子園へ出場するのではないかと市全体が期待と熱気にあふれていた。

このような石動高校野球部と連携し、市内の野球人口と中学校の野球部員を増やしていくことにより、石動高校野球部でプレーする選手が増えてくると思う。そして、高校野球をする人が増えてくれば、スポーツ少年団などの指導者となって野球人口の増加に貢献してくれる人材も増える。

部活動には地域を元気にする力があり、これからも継続していくことが必要である。また、中学校の部活動は、人づくり・人生の土台づくりの場であり、人間形成に一番大事なものであると思う。

筆者は中学校野球部の保護者であり、部員数の確保の問題に直面している。しかし、問題解決は簡単ではなく、そして時間がかかることを、レポートを作成しながら改めて理解した。筆者の子どもが中学生の間には問題は解決できないと思うが、これから中学校の野球部に入りたい子どもたちが、人数が揃わないために硬式野球クラブに仕方なく入るということがないよう、中学校で軟式野球に取り組める環境を整えていきたい。

そのために、市の職員として、また野球スポーツ少年団の代表経験者として、保育所（こども園)、スポーツ少年団、スポーツクラブなどと連携して、自分のできることから進めていきたい。そして、次世代へとバトンをつないでいきたい。

【参考文献・資料】

・加盟校調査集計表（公益財団法人日本中学校体育連盟）
・学校基本調査（文部科学省）
・国勢調査（総務省）
・小矢部市教育委員会提供データ
・運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン（スポーツ庁）